

試験研究成果普及情報

部門	野菜	対象	普及
課題名：イチゴ新品種「千葉S4号」の栽培法			
<p>[要約] 定植時のクラウン径は9mm以上を目標に育苗し、7月中旬までに鉢受けする。育苗中の窒素施用量はポット当たり100mgを標準とし、9月下旬に花芽分化確認後に定植する。チップバーン抑制のため本圃の基肥は窒素施用量12kg/10a以下とし、定植後はpF1.7を目安にかん水する。</p>			
フリーワード イチゴ、栽培、育苗、夜冷短日処理、かん水			
実施機関名	主 査 農林総合研究センター 野菜研究室 協力機関 農林総合研究センター 野菜・花き研究室、流通加工研究室、 土壌環境研究室、海匠農業事務所		
実施期間	2012年度～2015年度		

[目的及び背景]

千葉県育成のイチゴ「千葉S4号」は、大粒で形が良く、うどんこ病に強い品種であることから、贈答用となりうる本県独自品種として、観光直売向け生産者から普及が望まれている。普及に向けて大果系の特性を保ちつつも、単位当り収量の増大と早期収穫に向けた技術確立が求められており、育成経過で明らかとなったチップバーンへの対策と併せ技術確立を行う。「千葉S4号」は平成27年8月に品種登録（登録番号第24428号）された。

[成果内容]

1 育苗管理

- (1) クラウン径9mm以上の充実した苗を定植した方が収量が多い（図1）。
- (2) ポット育苗では親株を10a当たり350株用意し、3月上旬までにプランターに定植し、7月中旬までに7.5cm～10.5cm鉢に鉢受けする。（表1、図2）。
- (3) 「千葉S4号」は育苗後半に肥料切れが生じて心止まりは発生しにくいだが、頂花房の花数が減少するため、育苗中の窒素施用量は頂花房の花数を株当たり100mgを標準とする。（図3）。

2 本圃管理

- (1) 「千葉S4号」は花芽が未分化で定植すると開花が遅れる（図4）。
- (2) 本圃の基肥窒素施用量が多いとチップバーンの発生が多くなるため、12kg/10a以下を標準とする（表2）。
- (3) かん水の目安はpF2.1よりpF1.7の方がチップバーンの発生が抑制される（表3）。
- (4) 低温期の1月は着色程度7～10割で糖度の差が少ないが、気温が上昇する3月は着色程度7～8割は、着色程度9割～10割と比べ糖度が低いため、収穫時期には留意

する（図5）。

3 早期出荷技術

（1）夜冷短日処理や間欠冷蔵処理により収穫は早まり、特に8月上旬からの夜冷短日処理が10～12月の収量増加の効果が高い（表4、図6）。

[留意事項]

- 1 6月下旬までの鉢受けは老化苗を防ぐため9cm～10.5cm鉢を使用する。
- 2 うどんこ病に強いが、開花期までの予防は徹底する。また炭そ病、萎黄病は抵抗性がないので、育苗期の予防、苗床及び本圃の土壤消毒を徹底する。

[普及対象地域]

県内全域のイチゴ栽培者

[行政上の措置]

平成27年度に技術指導資料として栽培マニュアルを配布する

[普及状況]

平成27年度試作者は農業事務所8カ所管内の51戸

[成果の概要]

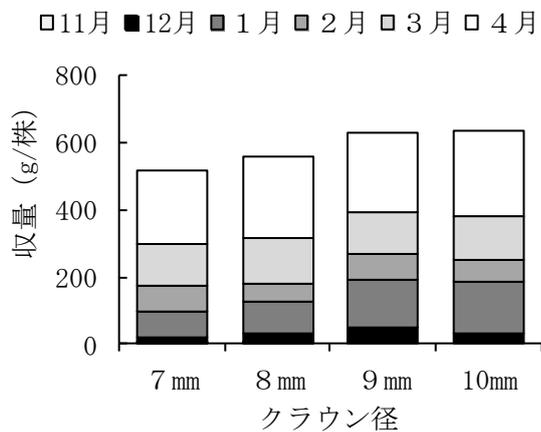


表1 「千葉S4号」の親株必要数

親株からのランナー数	22 本/プランター
3葉以上の子株数	80 株/プランター
親株必要数	338 株/10a

注1) 平成27年3月6日に3株定植
栽培槽は園芸プランター（長さ64cm、容量12.5L）
培土はいちご培土とクン炭を等量混合
施肥はCDUタマゴ化成30g/プランター
5月以降、IB化成S1号10gを3週間おきに追肥
5月までに発生したランナーは除去

2) 2015年7月14日調査

図1 苗の大きさが異なる「千葉S4号」の収量

注) 平成25年9月24日定植

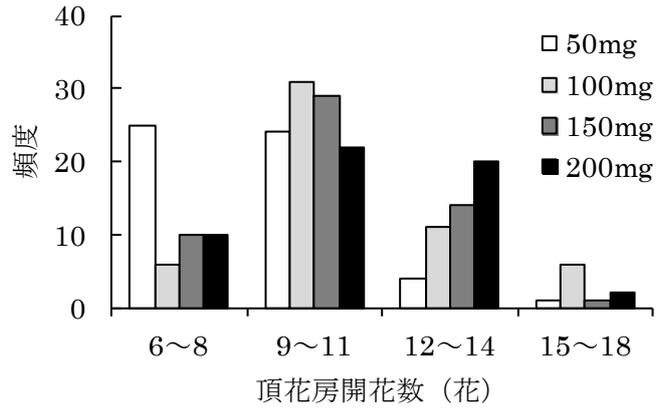
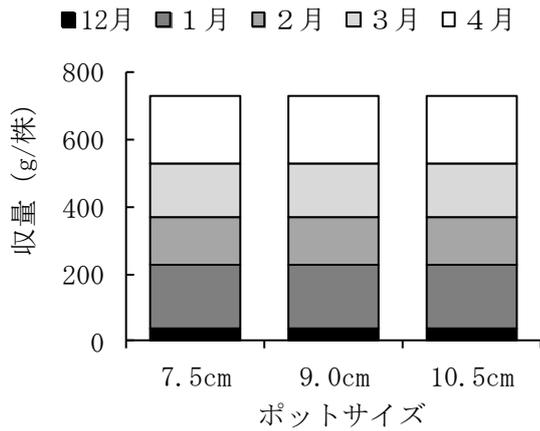


図2 ポットサイズが異なる「千葉S4号」の収量
図3 育苗中の施肥量が異なる「千葉S4号」の頂花房開花数

注) 平成25年9月24日定植

注) 平成26年9月24日定植

平成27年1月26日調査

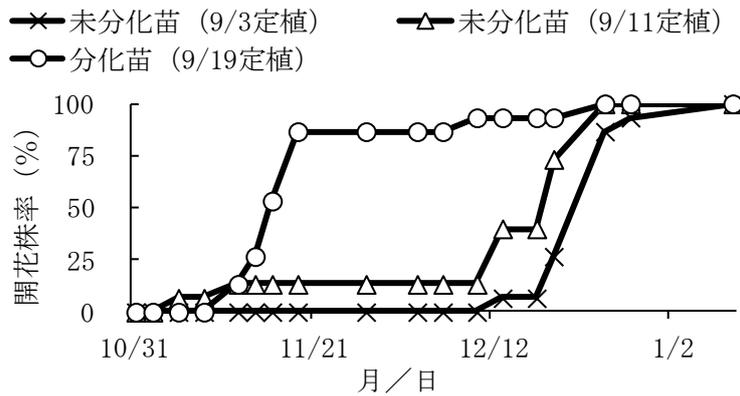


図4 定植日が異なる「千葉S4号」の開花株率の推移

表2 窒素施用量が異なる「千葉S4号」のチップバーン発生株率

10a当たり 窒素成分量	発生株率 (%)	
	有	無
0 kg	2	98
6 kg	10	90
12kg	13	87
24kg	21	79

注) 調査部位は頂花房第一花のがく片

表3 かん水による「千葉S4号」のチップバーン抑制効果

かん水 目安	かん水間隔 (日)		チップバーン 発生株率	
	マルチ前	マルチ後	葉	がく片
pF1.7	2	3	6%	0%
pF2.1	6	8	41%	16%

注1) 調査期間は2013年10月25日から11月29日まで

注2) マルチは11月5日に行なった

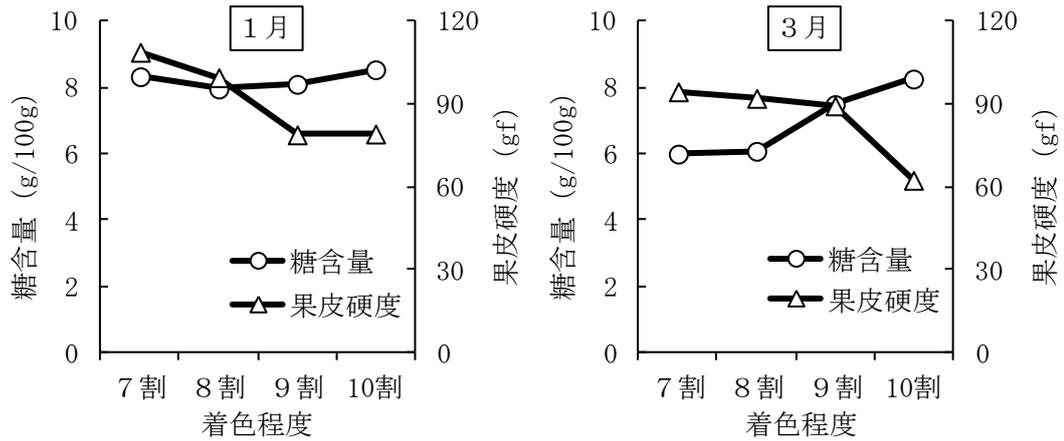


図5 時期及び着色程度が異なる「千葉S4号」の糖含量及び果皮硬度

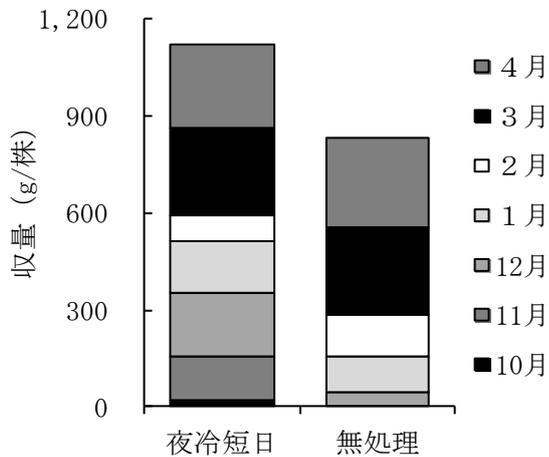


表4 夜冷短日処理及び間欠冷蔵処理による「千葉S4号」の促成効果

試験区	処理期間	収穫開始	年内収量 (g/株)
夜冷短日①	8/5～9/5	11月8日	234
夜冷短日②	8/15～9/12	11月19日	188
夜冷短日③	8/26～9/17	11月30日	129
間欠冷蔵	8/26～9/17	11月27日	144
無処理	—	12月13日	44

図6 夜冷短日処理による「千葉S4号」の収量

注) 夜冷短日処理は8月3日から31日間、
日長8時間、夜温10℃で実施

[発表及び関連文献]

- 平成27年度試験研究成果発表会 (野菜I、野菜II)
- 深尾・鈴木、イチゴ「千葉S4号」の栽培法 第1報 夜冷短日処理による収穫期の前進効果及び収量に与える影響、千葉県農林総合研究センター研究報告、第6号、2014年
- 深尾・鈴木、イチゴ「千葉S4号」の栽培法 第2報 育苗日数、育苗中のポットサイズ、施肥量が苗の生育及び開花、収量に及ぼす影響、千葉県農林総合研究センター研究報告、第8号、2016年 (投稿中)

[その他]

平成24年度試験研究要望課題 (提起機関: 生産販売振興課)